



第17話(2012年2月執筆)

【親ひつじ、子ひつじ(シャープ社訪問)】

from 谷本バルタイト美枝子



「インスピレーションの源はどこに？」という問いに、しばらく答えを探すお父さん。「むしろ、インスピレーションにならないものを探したほうが手っ取り早そうだね。」と、笑顔で助け船を出したのは息子さん。

応じてお父さんいわく…、「そうかも知れませんが、とにかく私は好奇心が強くて、どこにいても、何を見ているとも、新しい印象を自分の中に取り込もうとするエネルギーをフル回転させているんです。」

この力をオフにしてリラックスしているとき、あらゆる場面で集めてきたさまざまな印象が、自分の内部に深く沈んでいくのを感じます。そんな諸々の材料が、何かのきっかけや必然性に迫られて浮き上がってきたり、別の刺激に呼び出されるようにして思わぬ組合せが生じたりして、私の《ものを作ろう》という動機になっていくのだと思います。」

※(写真)トリアの街の円形劇場跡

※黒字:筆者(谷本)、青字:ゲアト・シャーフさん、緑字:トビアス・シャーフさん



話題の主はシャーフさん。

実は彼のお名前 **Schaaf** から a の文字を1つとった **Schaf** は、同じ発音で《羊》という意味の別の単語。羊毛製品でもないのになぜロゴが羊？と置いていらした方もあるかも知れません。

謎が1つ解けましたね？

私にとっても謎解きのような発見が一つ。それは工房の一室に集められた彼の《宝物たち》です。大人の腕の長さほど、幅もその半分を増すほどの大きな樹皮の一片、三脚状になった木の枝たち、

木の株や根、古い農機具の一部とおぼしき錆びた金属片に古い鉄車輪などなど…。

いつかシャーフさんの手によってアートに姿を変える日を待っているのでしょうか？

おびただしい数の、中には何も手を加えずともオブジェとして完成しているような自然と偶然のなせる技もあり、まとめて無造作に置かれながらも、それぞれが自分の声を放っている見事なコレクションです。



加えて印象深かったのは、ご自慢の狩の獲物を紹介してくれたシャーフさんの目の輝き。「ほら、この幹の剥き取られた部分はまるで風景のようになっているでしょう？」

「これはなんの変哲もない一本の枝だけど、表面が爬虫類の皮膚みたいだ。不思議だね。」「この幹の形はさながらヒトの胴体そのもの。」って…。

そんなシャーフさんの表情を見ていると、私たちの身の回りは宝の山なのに、何も見つけられずにいる自分はなんて目が曇っているんだろう？と思わずにはおられません。

その澄んだ瞳と冴えた感受性で、私たちがその他もろもろの中に見過ごしてしまうシャープな印象を拾い出し、《生む》力に変えている…、シャーフさんはそんな作り手として私の目に映りました。それでは以下に、ヴィットリッヒの工房兼お住まいに訪ねた、お父さんひつじ(ゲアトさん)と息子ひつじ(トビアスさん)のインタビューをご紹介します。

(写真)宝物を披露してくれたゲアト・シャーフさん

まず最初に、おもちゃのデザインから製造、販売をされるようになったきっかけについてお聞かせください。



私はベルリンの工科大学の出身で、エンジニアとしての資格を得た後、研究職に就いて、一時教鞭をとりました。後に企業に就職し、技師として現場を巡るという経験も積みました。そんな中で、自分の職業人としての生活を全うしていくことと、父親としてありたい姿との間に、埋められないギャップがあることに悩み始めました。子どもたちの成長を見守り、日々の育ちに積極的に関わっていく機会が少なすぎたのです。そんな折、かつて祖父母の住いだった農家を叔父夫婦が手放そうとしていることを知りました。そこでこの家と納屋を買いとり、一部を陶芸家であった当事の妻のアトリエとし、一部を私の工房にしました。こうして《もの作りへの捨てがたい夢》と《働く場と暮らしの場を一箇所において、できるだけ家族と共に過ごしたいという願い》を実現したのです。

それはいつ頃のことだったのでしょうか？

ここに越してきたのが83年、ニュルンベルクの見本市に初めて出展したのは翌年の84年です。

製品としておもちゃを選んだのはなぜですか？

家具や玩具など、もともと私たちの身の回りには自分の手作りのものがたくさんありました。ただ自分は家具職人としての技術を持っているわけではありませんから、自信をもって製作できるものとして《おもちゃ》を選んだのです。



デザインや製作上で特に気を遣っていらっしゃるのとはどんなことですか？

私がお届けしたいのは、赤ちゃんの五感に語りかけながらも、余計な刺激を与えず、だからこそ子どもの感覚が熟していく過程を共にできるおもちゃです。赤ちゃんが安心して時間をかけ、じっくりと接していけるおもちゃです。この世に生を受けて間もない子どもたちは、そもそも好奇心が強く、身の回りの世界を知っていくためにあらゆる感覚を駆使しているはず。

そんな赤ちゃんに、この生活環境に慣れきった私たち大人の耳目をひくほどの刺激を与えることはふさわしくありません。けばけばしい色、調和を欠いた形、不必要なまでに大きな音や不自然な音は、赤ちゃんの周りから極力遠ざけるべきだと考えています。この信念から、デザインも色使いもできるだけ簡素で調和の取れたおもちゃ、子どもが自分の手で、自分の能力でものを理解していこうとする気持ちを高められるおもちゃを作ってきました。

(上写真)太古の火山活動で生じた湖

シャーフさんのラトルは、とても丁寧に仕上げられた品質の高さと、仰るように簡素で調和的なデザインの完成度が特徴ですね。そして、形や重さに握りやすさへの工夫がされていて、かなり初期から使えるものが多いと思われます。今日は作り手であるシャーフさんご自身から、ラトルを月齢順に並べてご紹介させていただきたいのですが…。



※商品左より※

SC786:チュチュ、SC971:リング、SC962:コロリング、SC985:クラップモビル、SC806:ロペロ、SC964:ポンティ、SC966:フロイア

3ヶ月くらいの最も初期から使えるのはチュチュ（SC786）、リング（SC971）、コロリング（SC962）です。重さはこの順で14g、16g、30g。これらに比べて指を通せる穴が小さいクラブモビル（SC985）は35gと少し重く、4ヶ月頃からお勧めです。ビーズが車輪になって床を走らせることができるので、腹ばいで遊んだりハイハイの時期を越え《くるま》として意識した遊びにも使えます。その点でロペロ（SC806）のように36ヶ月くらいまで十分遊べます。鈴の入ったボンティ（SC964）、フロイア（SC966）はそれぞれ40g、45g、フロイアは大きなリングで握りやすそうに見えますが、片方に重さが集中しています。いずれも6ヶ月頃からお勧めです。

ありがとうございます、参考になります。さて、素材についてお話いただけますか？



可能な限り自然素材に頼ることにしています。使用する木の種類はカエデとブナ。トウヒ、カラマツ、モミなどは一般に水分を吸収しやすいことと、ささくれだちやすいので、小さな子のおもちゃには不向きです。カエデは木目に特徴があって、一つ一つの製品がそれぞれ個性のある仕上がりになるのが気に入っています。おまけに、殺菌力を備えた衛生的な素材なので、赤ちゃんのおもちゃにぴったりです。一方硬質なブナは木ビーズへの加工に適している上、特徴的な木目が塗料を透かしてもよく見えます。そこで白木の部分をカエデ、カラービーズをブナと使い分けています。いずれも保続管理を行う国内の林業者によって生産されたものです。ビーズを結んでいる紐は綿ですが、安全性のため中心部が化学繊維で補強されています。塗料は唾液に反応して色落ちしないことが条件、もちろんEN71の認証を得たものです。

ステンレスの鈴を使った製品では、子どもが直接触れる部分に使用されるか、フロイア（SC966）やロペロ（SC806）のように玩具の中に埋め込まれているかによって、面取りされたものとそうでないものを使い分けています。



ところでパッケージカラーに赤を選んだ理由は何でしょう？

暖かさ、そして愛情を表す色として選んだのが1つ、ベビーのおもちゃの他のメーカーに赤いパッケージがなかったことがもう1つの理由です。会社を始めた頃の社の便箋も白地に赤いロゴ、パッケージはその逆で赤地に白と組み合わせました。ある時期、静かさや落ち着きを連想させる色として青を勧められたこともあり、試してみましたが、どうもじっくりこなくて赤に戻しました。

これからの商品企画について新しいアイデアを暖めておられれば、こっそり教えていただけないでしょうか？

ベビー製品でも機能を変えて長く使えるおもちゃを考えています。また、新しい素材を取り入れることも検討中です。

ドイツやヨーロッパ市場と日本市場を比べて違いを感じることはおありですか？また、日本市場を対象にした特別な取り組みなどはあるのでしょうか？

ドイツでは個々のショップに卸していますが、日本市場とのやり取りはジョルダンのような優れた輸入元、卸元を通しての販売です。だから、両者を直接比べることはできません。日本市場に私の製品を届けて下さっている取引先のみなさんにとっても感謝しています。そんなみなさんの尽力に応じていくために、今後は各社への特別な対応を考えています。例えば、デザインの時点で、「この製品はジョルダンのために開発、製造しました」といったものを紹介していくのはどうでしょうか？ご希望をお聞かせいただければ幸いです。

それは嬉しい提案ですね。シャーフさんにこそこんなおもちゃを作ってほしいという願いがきっとたくさん出てくると思います。ところで、毎年干支のおもちゃを贈って下さるのをみんなとても楽しみにしています。これはどんなきっかけで始められたのですか？

「感謝の気持ちとしてオリジナルプレゼントを。」という理由で作っています。ご存知のように私の製品はどれも幾何学的な形をしていますから、干支の動物たちのような具象的なものを作るのは実は一苦労です。第1号は犬でした。今年の辰で、…7つ目ですか？あと5体、チャレンジします。

注釈：毎年1月になると、シャーフさんから取引先へ、その年の干支モチーフの置物がひとつ贈られてきます。手に取ると、その時のご苦労が伝わってきます。今年の干支、辰の画像は弊社ホームページのスタッフブログ、1月20日「[干支の贈り物](#)」をご覧ください。

みんなで楽しみにしています。さて、今日は息子さんのトビアスさんにもご同席いただいています。シャーフさんから後継者のトビアスさんをご紹介します。



去年のことでした、シャーフ社を継ぎたいという意志を話してくれたのは。思いがけないという驚きの気持ちに続いて、喜びをだんだんと実感しました。トビアスは子どもの頃から見本市のブース設定などをよく手伝ってくれ、とても気が利いて頼りになる仕事仲間でした。父と息子としてはお互いをよく理解している私たちですが、これからはビジネスのパートナーとして、新たにお互いを深く知り合っていくことになるでしょう。わが子ながら新たな面も発見できるに違いないと楽しみにしています。

トビアスさんは大学でビジネスや経営の勉強をされたんですね。

そうです。そして企業に数年勤めました。仕事には満足する一方、果たして一生をかけて本当にやりたいことはこれなのか？とあるとき自問するようになりました。そして、仕事を通じての、社会、よりよい社会への貢献をもっと実感したいと望んでいる自分の気持ちに気づきました。そんな折、父親の作ってきたおもちゃを思い出し、未来を担っていく子どもたちのために、せっかくのいい製品を絶やさないこと、そしてもっと多くの人たちに知ってもらうことを目標に、自分の力を発揮しようと決心したのです。

後継者としての夢をお聞かせ下さい。

シャーフは小さな会社です。小さな会社ならではの良さを守りつつ、発展を目指します。むやみに規模を大きくすることが目的ではなく、ひとところに停滞することを許さず常に歩み続ける会社でありたい、それが私の夢です。父の製品に対する思いや哲学をそのまま受け継ぎ、企業勤務で得たマーケティングの経験を生かして、これまでよりも多くの顧客のみなさんに製品を、そして製品に込められた私たちの思いをも伝えていきたいですね。その第一の取り組みとしてホームページを完成させました。

思えば私自身は、自分の製品について語ることに余りにも少なすぎたのかもしれない。



寡黙な父さん羊に代わって、息子さん羊の声がこれから多くの方々に届くよう願います。シャーフさんご自身はどんな夢をお持ちですか？

(写真)かつてのシャーフ社製品のおもちゃ。

トビアスが今後の活動に満足でき、幸せに生きてくれることを願っています。私自身は、おもちゃ作りを決心した頃ある意味で断念し、作る機会を逸したものの思いをまだ捨てずにいます。今後、シャーフ社を息子の手に委ねていきながら、そういったものの製品化に向けても活動したいと思っています。それはシャーフ社が製造するのではなく、デザインや考案を他社に提供するという形で実現するつもりです。私にとっても新たなステップへのチャレンジです。そして…、できれば近いうちにまた日本を訪ねたいですね。

みんなで楽しみにお待ちしています。では最後に日本のお母さんたちへのメッセージをお聞かせ下さい。



製品にこめた思いそのものが私のメッセージです。悲しいことに、学童年齢になって、注意力欠陥や多動性を抑えるために薬品に頼らなければならない子どもたちがたくさんいます。生まれたとたん、あまりにも多くの刺激や変化の多い環境に放り込まれて、じっくり熟すチャンスを得られなかったことと少なからず関係があると考えています。先ほどもお話したように、赤ちゃんは、安心つくり接することのできるものを与えられてこそ、身の回りの世界に時間をかけて馴染んでいき、その後大きくなるにつれ出会っていく色々なものや変化を受け入れ、将来の生きる環境に適応する力を身につけていくと確信しています。私たちの知らないところからやってきて、やがて私たちの知る由もない未来へと巣立っていく赤ちゃん。強く育ててほしいと、お母さん方に願いを託します。

2012年2月18日、シャーフ社訪問インタビューの記録より